二〇一〇年一二月二一日（参加者一六名）

泣き顔の児に外したるマスクかな　有香
上げ下げに軋む床板畳替え　〃
マスクせし目尻が笑まふ小児科医　〃
大マスク顎に吊すは主治医かな　うつぎ
ふり向けば落葉しぐれに明智寺　〃
笹鳴きに応ふ笹鳴き良寛碑　〃
落葉してのっぺらぼうの大欅　よし子
公園の空のベンチに冬日燦　〃
鉄塔の影たちあがり冬夕焼け　〃
雪山へつづくセコイア並木かな　せいじ
百選の苑の裸木美しき　〃
湖昏れて影絵となりし鴨の陣　〃
ぼけ封じ観音へ賽し冬ぬくし　きづな
淀君の墓はここよと笹鳴ける　〃
散紅葉いよよ嵩なす冠木門　〃
饒舌の妻恙なく根深汁　宏虎
白障子いまよぎりしは鳥の影　〃
尻押され売られゆく牛冬の朝　こすもす
信号の他見えぬなり霧の街　〃
塾の子の帰るを待ちて聖菓切る　百合
冬帝の比叡の山を仰ぎけり　〃
大根焚世相話の尽きるなし　小袖
蓮枯れて石垣高く隅櫓　〃
姑と同じふる里干菜汁　菜々
片付け魔なるは性分木の葉髪　〃
束の間を茶房に無聊年用意　かれん
賀状書く兎の耳に朱をさして　〃
柚子三つお手玉となる終ひ風呂　つくし
ボロ市の店主が磨く派手な壺　〃
老犬を臥させて落葉掃きにけり　ぽんこ
向き合ふて会話のふへし炬燵かな　満天
ポインセチア老二人なるリビングに　はく子

定例句会みのる選

二〇一〇年一二月二一日（参加者一六名）